

衛生管理・感染症予防対応マニュアル

株式会社オフィスクラタ

PIECE グループ

令和 6 年 2 月 1 日作成

目次

I .はじめに	2
II .感染症対策のために必要なこと	2
III .注意すべき主な感染症・食中毒	3
IV .感染症対策の基本	4
V .平常時の対策	5
VI .嘔吐物・排泄物の処理	7
VII .感染発生時の対応	7
VIII .マニュアルの閲覧について	8

I .はじめに

利用者、職員が集団で活動する放課後等デイサービスでは、感染症が広がりやすい状況にある。そのことを職員一人ひとりが認識し、集団感染や感染症・食中毒などを起こさないように普段から衛生面にも十分気を付ける必要がある。

このような前提に立ち、各事業所では、感染症・食中毒を予防する体制を整備し、平常時から対策を実施するとともに、感染発生時には感染拡大防止のため、迅速かつ適切な対応を図ることが必要となる。

II .感染症対策のために必要なこと

1. 適切な衛生管理

利用者と職員が感染の危険から守られるよう衛生管理を徹底する。

(1) 事業所の感染対策

- ・設備の衛生管理
- ・飲み水及び食品の衛生管理
- ・衛生管理に必要な器具等の点検など
- ・職員の清潔保持、健康状態の管理
- ・手指洗浄の設備
- ・使い捨て手袋などの使用
- ・調理器具の洗浄、消毒

(2) 感染症の発生やまん延を防止するための措置

- ・感染症や食中毒を防止するために必要に応じて保健所の助言・指導を受ける
- ・空調などで室内の適温を確保(夏季 26～28℃、冬季 20～23℃)。定期的な換気による空気の入れかえを行う

2. 管理者の主な役割

- ・利用者の特性、事業所の特性、事業所で注意すべき感染症の特徴の把握
- ・感染症対策に対する正しい知識の習得と日常業務における実践
- ・事業所内活動(委員会の設置、感染症マニュアル作成、研修実施、事業所内整備等)の実施
- ・関係機関との連携
- ・職員の労務管理(健康管理、職員が感染したときの人的環境の整備等)

3. 職員の主な役割

- ・利用者の状況の把握
- ・感染症対策に対する正しい知識の習得と日常業務における実践
- ・自身の健康管理

Ⅲ.注意すべき主な感染症・食中毒

1. 飛沫感染するもので児童の罹患が多く、流行を広げる可能性が高い感染症

- ・インフルエンザ感染症
- ・コロナ感染症
- ・百日咳、麻疹（はしか）
- ・流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）
- ・風疹
- ・水痘（水ぼうそう）
- ・咽頭結膜熱（プール熱）

2. 学校教育活動を通じ、学校において流行を広げる可能性がある感染症

- ・コロナ感染症
- ・腸管出血性大腸菌感染症
- ・流行性角結膜炎
- ・急性出血性結膜炎
- ・感染性胃腸炎（ノロ、ロタ）
- ・溶連菌感染症
- ・マイコプラズマ感染症

3. 集団感染の可能性は少ないが、血液を介して感染する感染症

- ・ウイルス性感染症（B 型、C 型）

4. 食中毒

- ・腸管出血性大腸菌（O157、O111 など）
- ・カンピロバクター
- ・サルモネラ属菌
- ・セレウス菌
- ・黄色ブドウ球菌

- ・ウエルシュ菌
- ・ノロウイルス
- ・寄生虫(アニサキス)

多くの感染症は、典型的な症状を呈する場合のみならず、感染しても症状の出ないもの、症状が軽微で医療機関の受診まで至らないものも存在していることを理解することが重要である。

IV. 感染症対策の基本

1. 感染成立の3要素

(1)感染源 (2)感染経路 (3)感染を受けやすい人
の3つの要素が揃った時、感染が成立する。

2. 感染源の排除

感染源となるもの

- ・嘔吐物、排泄物
- ・血液、分泌物(つば、痰、鼻汁等)
- ・使用した器具、機材

感染源となるものには直接素手で触れず、手袋をして取り扱う。

感染症には潜伏期間や治療の後まで病原菌が排出されるものがある。症状が出ている間だけでなく、適切な期間対応することが必要である。

3. 感染経路の遮断

感染経路の遮断には以下の実践が求められる。

- ・感染源を持ち込まない、拡げない、持ち出さない。

上記のためには、手洗い・うがいの励行、事業所内の衛生管理が重要。

また、感染源となるものを扱うときは、手袋、マスク、エプロン等の着用が必要である。

主な感染経路には、接触感染、飛沫感染、空気感染、血液媒介感染がある。

感染症にはそれぞれに特有な感染経路がある。

接触感染の特徴

○手指、器具、食品を介して感染

- ・コロナ感染症 ・感染性胃腸炎(ノロ、ロタ) ・腸管出血性大腸菌感染症

飛沫感染の特徴

- 会話、くしゃみ、咳で放出された飛沫を吸い込む感染
- 飛沫は通常1メートル以内の床に落下し、空中を浮遊しない
 - ・インフルエンザ感染症 ・コロナ感染症 ・マイコプラズマ肺炎

空気感染の特徴

- 会話、くしゃみ、咳で放出された飛沫核を吸い込み感染
- 飛沫核は空気の流れにより飛散する
 - ・コロナ感染症 ・麻疹 ・水痘

血液媒介感染の特徴

- 病原体に汚染された血液や分泌物が、針刺や傷口への接触により感染
 - ・B型肝炎、C型肝炎

事業所に病原体を持ち込まない、持ち出さないために、事業所に関係する全ての人が手指衛生を徹底する。必要に応じてマスクを着用する。中でも、職員は利用者と長時間接するため特に注意が必要である。健康管理に心掛け、感染症に罹患した際には十分な休養が取れる環境づくりも必要である。

4. 感染症を受けやすい人の抵抗力の向上

感染を受けやすい人は予め免疫を与えることにより、未然に感染症を防ぐことが重要である。ワクチンを接種することにより感染する可能性を減らしたり重症化したりすることを防ぐことができる。

V. 平常時の対策

1. 環境

事業所内の設備を利用者や職員が利用しやすい形で整備することが大切である。手洗い場では、タオルの汚染による感染を防ぐため、ペーパータオルを使用している。

2. 清掃

1日1回以上の湿式清掃を行っている。部屋のドアノブ、トイレのドアノブ、便座は消毒液付紙ナフキンで清掃している。汚れた場合は適宜清掃している。

3. マスクの着用

必要に応じてマスクを着用する。

4. 職員の手洗い

手洗いの際には以下の点に注意する。

- ・手を洗うときは時計や指輪を外す
- ・爪は短く切っておく
- ・まず手を流水で軽く洗う
- ・石けんで洗う
- ・石けん成分をよく洗い流す
- ・使い捨てのペーパータオルで手をふく
- ・手を完全に乾燥させ、スキンケアを行う

5. 利用者の手洗い

利用者の間で感染が広がることを防ぐため、事業所へ来たときに、日常的な手洗い習慣が継続できるように支援する。

手洗い場所の備え付けのペーパータオルを使用するか、自分のハンカチを用意し使用する。

下記に手洗いの順序を示す



車に乗る際、もしくは事業所に到着したら、職員が利用者の検温をする。その体温を業務日誌に記入する。

VI.嘔吐物・排泄物の処理

嘔吐物・排泄物は感染源となるため、処理には十分な配慮が必要である。

1. 処理する際の注意事項

- ・処理を行う職員以外は立ち寄らない
- ・処理用キッドを迅速に対応できるよう備えておく
- ・処理を行う職員、用具を準備する職員、利用者を近寄らせない職員で連携して対応する

2. 処理の手順

- ・手袋、エプロン等を着用する
- ・嘔吐物をペーパータオル等で覆う
- ・使用する消毒液をつくる
- ・ペーパータオルの上から消毒液をかけ、嘔吐物を中央に集めるようにしてビニール袋へ
- ・消毒液でゆるく絞った使い捨ての布で床を広めにふく(2回)
- ・手袋の使用していた側が内側になるようにしてビニール袋へ
- ・清掃処理後、換気
- ・利用者の服に嘔吐物がかかっている場合は、ビニール袋へ入れ密閉し、持ち帰りとする
- ・処理に使用した用具等はビニール袋へ入れて密閉し廃棄する

VII.感染発生時の対応

1. 発生状況の把握

- ・利用者、職員の状況把握。
- ・症状及び経過の確認。
- ・医療機関を受診した際は、診断名、検査結果、治療内容の確認をする。
- ・事業所全体の状況把握。
- ・日時、感染拡大学区等の発生状況の把握。

- ・平常時の有症者数との比較。
2. 感染拡大の防止
 - ・管理者は感染状況を職員に周知し対応の徹底を図る。
 - ・感染拡大防止策の実施。
 - ・手洗い、感染源の適切な処理等を徹底する。
 - ・協力医療機関(古市:堀江内科小児科医院、宮園・相談・串戸・ぐるっぼ:たなべ小児科)や保健所、市役所等(広島市:自立支援課、廿日市市:障害福祉課)に相談し、助言を得る。
 - ・発生状況に応じた施設内の消毒を行う。
 - ・必要に応じて来所者の制限をする。
 3. 利用者・家族への情報提供

利用者・家族の不安を和らげるため、また利用者・家族への感染拡大をふせぐため、適切な情報提供を行う。
 4. 行政への報告

管理者は、状況に応じて市役所及び保健所へ報告する。

VIII.当マニュアルの閲覧について

当マニュアルは、利用者及び家族等が確認できるようにホームページに公表する。